



Title	新潟県十日町市における婦人学級の展開：中山間地域の実践を中心に
Author(s)	吉田, 弥生
Citation	社会教育研究, 33, 15-27
Issue Date	2015-04-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59232
Type	bulletin (article)
File Information	AN00231372_33_15-27.pdf



[Instructions for use](#)

新潟県十日町市における婦人学級の展開 ―中山間地域の実践を中心に―

吉 田 弥 生*

目 次

はじめに	15
1. 十日町市における婦人学級の成立経緯	16
1-1 十日町市の公民館体制	16
1-2 婦人学級のはじまり	17
2. 婦人学級における学習実践の展開	18
2-1 初期の活動内容	18
2-2 婦人教育研究集会による学習活動の支援	19
2-3 婦人学級の活動の停滞	20
3. 新たな活動への展開	21
3-1 下条地区	22
(1) 出稼ぎ文集の試み	22
3-2 飛渡地区	22
(1) 通信婦人学級の試み	22
(2) 地域史学習から地域づくり実践へ	23
おわりに	25

はじめに

本稿の目的は、1950年代後半から70年代にかけて新潟県十日町市で行われた婦人学級の学習活動、および、婦人学級を起点に生み出された諸実践の展開を明らかにすることである。

十日町市を含む中魚沼郡の各市町村と津南町を合わせた妻有^{つまり}地域は、農村女性による生活記録実践で名高く（『豪雪と過疎と』1976年、未来社）、1950年代後半から60年代末ごろまで多くの婦

* 博士後期課程3年

人学級で生活記録実践は軸となる活動であった。これまで、妻有地域で行われた婦人学級の全体像や実践の内実は詳細に検討されていないものの、生活記録運動や自分史などの「書く」学習活動として、あるいは女性のエンパワメント実践として言及されてきた¹。また、60年代末以降の婦人学級については、農村女性の生活記録を扱った先行研究で述べられてきたように²、高度成長期の急激な地域社会の変容により十日町市の生活記録実践も停滞をむかえたと総括されてきた³。たしかに当時、十日町市の多くの地域で、文集の定期的な製作・発行が当初行われていた様にはできなくなっていた。しかし、いくつかの中山間地域の集落では、高度成長期の矛盾が地域に噴出したにも関わらず、様々な「書く」実践や学習文化活動、地域づくり活動の存在が現在に至るまで断続的に確認できる。そして、そのような実践の蓄積を持つ地域では、都市住民やIターンの若者との協働、アーティストとの協働など、文化的・経済的側面から活発な地域づくり実践が開いてきた⁴。したがって、当地域で行われた婦人学級の学習・文化活動は、地域づくりへの連続性をもたらす契機を含むものであったと推察できる。

では、なぜ高度成長期に生活条件の厳しさを増した中山間地域の婦人学級において、学習活動の停滞を乗り越えることが可能だったのだろうか。また、その後の学習活動や地域づくり実践の展開は、婦人学級がいかなる基盤を形成したことによるものだろうか。これらの点を明らかにすることは、農村の婦人学級における生活記録実践等の学習活動に対する先行研究の理解・総括に対し、実践理解の射程を再検討すべき余地があるということを示すことにつながる。さらには、現代の条件不利地域の地域づくりを支える社会教育実践のあり方を考察する上での一助となるだろう。

本稿では、十日町市の婦人学級で展開された学習活動が、地域社会にとってどのような条件を形成し、その後の地域づくり実践を生み出していったのか、また、それはどのような質の地域づくりとなるのかといった検討を進めていくための基礎作業として、以下の点に限定して課題に迫りたい。

まず、十日町市における婦人学級の成立経緯と、婦人学級における学習活動の展開を概観する。続いて、婦人学級の学習活動を起点に新たな活動が生み出された中山間地域の地区における活動の推移を確認する。以上を検討するにあたって、地域の社会的状況との関係に注目して検討を行う。これらの作業を通して、十日町市の婦人学級のいくつかが学習活動の停滞を抜け出した条件を仮説的に整理したい。

1. 十日町市における婦人学級の成立経緯

1-1 十日町市の公民館体制

十日町市の公民館は、1947年に開館した。設置目的として、公民館とは「住民の茶の間」であり、「住民の文化教養のための事業を行う、いわゆる学習の場」であり、「地域振興の拠点になる」ことを掲げた。よって、創設時から専任の職員を置き、1946年に新発足した青年団・婦人会・文化協会

などの本部の役割を担った。こうして、草創期から官公庁の講習会、各種組合・団体の総会、町内会・委員会の集会や趣味の集まりなど幅広く利用され、1949年度には県から優良公民館として表彰された。1954年の市制施行後は、十日町市公民館設置条例により、十日町地区の十日町公民館を本館、市域内の旧村公民館（川治、中条、中条飛渡、六箇、吉田、下条、水沢）を地区館とし、それまでの分館もあわせて「本館一地区館一分館」制に改編する。その際も、全地区館に常勤職員を配置し、公民館の水準差の解消と地区ごとの実態に即した事業展開が目指された⁵。

1-2 婦人学級のはじまり

十日町市に公民館が設置されてからほどなくして、市街地にある本館を中心に婦人講座や成人講座が開講され始めた。しかし、旧村部である農村地域の女性にとって、地区公民館とは1950年代半ばまで婦人会主催の婦人教養講座、講演会の開催場所というくらいのものであったため⁶、十日町市で初めて婦人学級が開設されたのは1958年のことである。中条地区の中条婦人学級（地区館）、大井田婦人学級（分館）新座婦人学級（分館）の3学級が、文部省委嘱婦人学級として開設することになった。

そもそも中条地区に婦人学級が開設されることになった契機は、地区婦人会の活動のあり方に対する問題意識の高まりである。当時の婦人会活動は毎年恒例の行事や講演会⁷のくりかえしであり、「いったいこれでいいのだろうか」と自問自答する役員が多くなっていた。ところが、一般会員は昔ながらの考えのままなにひとつ積極的な意欲を見せようとしないうえ、役員と一般会員とのギャップが1955年頃から強まり、運営に携わる役員の中で「みんなの婦人会にするためには、役員だけが会のあり方を勉強してもうまくいかない」「みんなが心から願っていることを取り上げ、考える機会をつくる。これが本当に研修ではないだろうか」という声が高まっていった。その結果、公民館のサポートをうけながら、1956年にお母さんたちがみんなで話し合う会として「子供のしあわせを願う母親の集会」を開催するに至る。その際、会では熱心な話し合いがなされたことから、第二回「子供のしあわせと母のしあわせ、新しい母親の生き方について考える」、第三回「赤ちゃんの健康と幸福のための集会」と回数重ねられていった。これらの集会に集った人たちの熱心さやなごやかさは、行事を会員のものとしてほしい気持ちで悩み続けてきた役員たちに、これからの婦人会の進むべき方向を示してくれた。そこで、一部の会員から、特定テーマによる継続学習の希望がよせられたことが、婦人学級開設への直接因となる。

しかし、職員と婦人会役員の間では、「特別な先入観をもたぬように、流行語のようになりつつあった婦人学級という名称は当分のあいださけて、いままでの勉強をそのままけいぞくしながら、自然と学級にふさわしい内容をもつように」進めていったという。こうして、学習を重ねて問題意識を深めてから学習希望調査が行われた。その結果に基づいて、グループ学習・集落学習を主体にすることが決まり、「食生活」や「^{ママ}か業のやりくり」等のグループが作られて「地区婦人会が公民館とタイアップして婦人学級をひらく」第一歩が踏み出された。各グループの助言者の選定は、女性た

ちが気楽に学習できるようにと平素から会員と親しい人をお願いするという方針になり、小中学校の先生や農協職員、栄養士が引き受けることとなった。学習は熱心に取り組み、教委側は「皆が仲良しになる」と「問題^マ追及^マの態度」を伸ばしてゆくことを二大目標としていたが、二年間の成果として両方とも得られたと当時の職員は記録している。また、二年間のあゆみの記録として「手をつないで」という学級文集も作成された⁸。

以上の中条地区婦人学級の成立過程は、他の地区館・分館においても婦人会へ学習支援を行う際のモデルとなり、ほぼ同様のプロセスを経て婦人学級の開設がなされていった⁹。

2. 婦人学級における学習実践の展開

2-1 初期の活動内容

前節で述べたように、1950年代末には、十日町市の多くの地区で公民館職員による学習組織づくりがすすめられた。しかし、町場に対し山村に暮らす女性たちは、「久しい年月にわたって半封建的な社会や、がんじがらめになった家庭のしがらみに生きてきた婦人^マたち」¹⁰であったことから、婦人学級の開設当初は「婦人^マたちが胸の内、心の中を話し合う場」をこしらえていくことが目指された。そのために、「ひとりひとりが孤立することなく、(略)語り合うこと、そのことによって、たとえささやかであっても心の垣根を取り払っていくことを進めていった」¹¹。女性たちにとって、当初の「婦人学級」とは月に一度「デバタ労働(機織り)からの解放」され、同じ境遇の者どうしおしゃべりができる憩いの場であった¹²。そこから徐々に「家庭^マや部落^マの中から問題を掘り起こして考えあう話しあい」が進められていった¹³。

しかし、姑や夫が厳しい家の女性はなかなか出てこれられないことや、忙しい時期は出席者が激減しがちであったこと、または学級の感想文を記してもらうため、「まわしがき」や「らくがき」と名付けられたノートが用意され、学級生の交換ノートとして回すことが始められる。この方式は、吉田地区、六箇地区、下条地区、水沢地区など、十日町市の様々な地区館や分館で行われていった。そのノートには何でも書いてよく、例えば「らくがき」はきらくに何でも書くと云^マう約束です (略) みんなが集って勉強することは大変なので、せめてみんなで話し合う時のような気持ちで書いてほしいと思います」(「らくがきノート」山谷つくし会、1961年)のような但し書きでその旨が強調されている。そして、そのノートは一周するたびに文集化して、婦人たちに配布するという取り組みも見られた。

ただ、仲間内で回す「まわしがき」や「らくがき」であっても、女性たちは書く勇気を持つのに一苦労したようで、名前を出さない人が多いのはもちろんのこと、書いては破る人が続出し、「破らないでください」という注意が出される始末であった¹⁴。こうして、先に書いている人が励ましながらノートが無事に回るようになっていった。

このノートに書かれた女性たちの考えやつぶやきは訴え・問題提起と発展していき、学習テーマ

に取り上げられていった。日々の暮らしの中でふと浮かんだ喜び、不満がつづられた生活記録も、学級生どうしてノートが読まれることで、共感されたことは、解決にむけてできることはないか、探っていく応答も見られた。また、婦人学級でやってみたいことも述べられた。さらに、婦人学級の母体である婦人会のあり方への批判もあり¹⁵、彼女たちが長らく抱えていた困難を打破していくチャンスとして、このノートが捉えられていたことがわかる。

前述の「まわしがき」形式は、数年続いたのち年度の節目に原稿を集め発行する形式へと移行していった。また、年度末になると、公民館職員が一年間のふりかえりや婦人学級の感想文を学級生から募集し、それをまとめた学習記録のような文集も出されるようになった。こちらも内容に関する指定は特に無いようであるが、現在の自分の暮らしを踏まえた今後の会への要望、意気込みが綴られている文章が目立った。

女性たちにとって、励まし合いながら文章をつづり、それが初めて「冊子」として活字となり発行されたことは非常に喜ばしい事であった。匿名やイニシャルといえども、集落の中のメンバーが自らの生活をつづっている文章は、話し合いやおしゃべりも並行して行ってきたことから、学級生どうしだと誰がどれを書いたかわかっていたようだ。よって、文集が完成するとお互いに「おまえじゃうずに書いたなあー」と声を掛け合っていたという。また、一度書くと「今度はもっと上手にかいてみよう」と、文章を書くことへの向上心も高まった¹⁶。集落ごとの文集づくりは、婦人会の年に一回の恒例行事となっていった。

2-2 婦人教育研究集会による学習活動の支援

少しずつ女性たちの「書く」取り組みが動き始めたことで、公民館職員や研究者による婦人教育研究グループ（以下、「研究グループ」とする）では、女性たちが自分の思いを「書く」ことへの抵抗・困難をいかに乗り越える支援ができるか、重点的に話し合われるようになった。この研究グループでは、「思いは胸中に溢れていても、まず鉛筆を持つこと、そんな生活を離れてすでに久しい年月がたっているし、誰にも共通する字の巧拙、人に見られることの恥かしさ、何をどのように書くかといった見方、方法の問題などなどが続出しては、臆するのが当然」という理解に立ち、「まず話し、そのことばをそのまま綴る、短くてもよい、文体も短歌であろうと詩詞であろうと文章であろうとなんでもよい、字は誤字や脱字は勿論、仮名でも片仮名でも一向構わない」とはげましていくことが重要と確認された。また、閉ざされたムラ社会ゆえに、女性たちの投稿は匿名のものがほとんどだったが、研究グループでは「それで充分ではないか」「むしろその方が自然だ」という声が多く、「大事なことは書きやすく書くことである」という方針を共有した¹⁷。職員らは何を書いてもよいと励ましながら、学級生に原稿用紙を渡していった。そして学級生と主事たちとの交流が深まるにつれて徐々に作品が出るようになっていった¹⁸。

以上のような職員の働きかけによって、集落ごとに創意をこらした文集が刊行されるようになって

たのをうけて、研究グループでは「仲間のあいだだけで回し読みされるのはもったいない」と考え、地域内で発刊された数多くの文集からいくつかの作品をまとめて¹⁹「妻有のかあちゃん」第1集（1962年）を発行し、各方面に配布した²⁰。さらに、この文集をもとにした婦人教育研究集会在開催され、中魚沼郡の女性たちが各婦人学級から数名ずつ代表して集まった。集会では文集を読みあい、話し合い、討論しながら、自分たちが置かれた厳しい生活の条件に声を荒げる人や涙を流す人もいたほどであった。その後、「妻有のかあちゃん」第1集は、多くの婦人学級で話し合いの教材として活用された。そして「こういう文ならば、おらにも書ける。おらも書いてみよう」と多くの婦人をはげまし、これを機に堰をきったように各集落、公民館分館、冬季分校などを単位に刊行される文集の数がにわかに増え、それ以後毎年定期的に刊行されるものもあった。1965年の時点では、中魚沼郡全体で女性たちの学習グループ数は280にのぼった²¹。

1960年代半ばには、中条地区館に続き様々な地区や集落で婦人会の話し合い学習が機を熟しつつある時期²²をむかえ、共通の生活課題の整理や、解決すべき問題の確認が進められた。学習内容は表1のように、家事・育児に関すること、社会のことから趣味的学習まで幅広いものであった。こうして中条婦人学級と同様に、多くの婦人学級では、生活課題ごとにコース別学習（月一回程度）と全体学習（二か月に一回程度）のカリキュラムに基づく学習となり、「文部省委嘱婦人学級」として行われることとなった²³。コース学習による婦人学級が開始されると、女性たちは各々の関心に沿ったコースで学習を進めていった。

表1 婦人学級のコース一覧（1966年当時） 「市報とおかまち」昭和41年5月～12月号を基に筆者作成

川治地区	中条地区	飛渡地区	六箇地区	吉田地区	下条地区	水沢地区
デバタ中心の生活問題 暮らしの勉強に強くなる 税金、身の回りの法律	育児 家庭教育 大正 ハタ タコ 食生活 デバタ	栄養と料理 映画と話し合い 子供のしつけ 時間を生かす工夫、環境と衛生 家庭教育 家族の人間関係 デバタ従事婦人の健康	家計のやりくり 栄養料理 文章の書き方 家庭の病気 生け花 余暇の利用法	子供のしつけ 農繁期の食生活 成人病 現代語 社会見学	育児 暮らしの工夫 料理 生け花 明治大正	食生活 生け花 家庭問題の話し合い 栄養と食生活

また、生活記録文集の発行も年度末の恒例行事と位置づき、学級生の中から文集発行担当者を決めるようになるといった、主事まかせではない自主的な文集発行を進める学級もみられた。

この時期の文集の内容は、日々の暮らしの中で思ったことに加え、今年度の婦人学級で印象に残ったことや学びへの決意、今後の学習活動への要望など意欲的な内容がつつられていた。

2-3 婦人学級の活動の停滞

しかし、1960年代後半にさしかかると、十日町市の婦人学級も生まれては消えを繰り返していく

ようになる。このような背景には、高度経済成長による地域社会の急激な変貌、農村においては著しい物価上昇と米価のすえおきによる現金の必要性の急激な高まりがあった。現金収入を得るために、農村女性の生活はデバタ労働が大きな割合を占めるようになり、人と会う時間すら惜しまれるほどになっていた。それまではデバタ労働は冬の副業程度のものであったが、時間さえあれば行う通年の労働のひとつとなった。さらに、冬期間の夫の出稼ぎも例年のこととなり、女性が家庭運営を一手に引き受けねばならず²⁴、めまぐるしい日々の中で集まりに出ることも、文章を書くことも困難な状態になり、婦人学級の学習活動は停滞していった²⁵。つまり、これまで前提としていた生活のあり方が崩れて家庭や地域のつながりは失われていったことで、婦人学級で取り組んでいた「生活課題」の学習と自分たちの生活実態がかけ離れていき、女性たちにとって婦人学級で学ぶ理由が薄れていったためと思われる。

3. 新たな活動への展開

前述したとおり、これまでの学習方式（コース別学習と全体学習）では出席者が減少して婦人学級の継続が困難となったことから、集落ぐるみの学習活動は多くの婦人学級で解消されていった。そのような地域の婦人教育事業は趣味・教養の教室がいくつか開講されるにとどまり、カルチャースクールの性格が強まることとなった。つまり、地域社会や生活の課題に即した学習活動からは少し距離が生まれることとなり、個別的な趣味・関心を重視した学習活動へと移っていった。（表 2 参照）しかし、高度成長期に地域や暮らしに急激な変化が起き、最も厳しい状況となった中山間地域の地区館・分館から、生活記録実践を基盤に地域社会での生活をつくりなおそうとする新たな活

表 2 婦人学級のコース一覧（1977～78 年当時）「市報とおかまち」昭和 52 年 6 月～翌年 8 月号を基に筆者作成。() は集落名。

	川治地区	中条地区	飛渡地区	六箇地区	吉田地区	下条地区	水沢地区
コース内容	料理 食べ物を考える	「おかあさんの勉強室」(地区館、大井田・新座分館)	枯木又を調べる(枯木又) 郷土民謡の伝承 健康問題と地域を見直す 料理 生け花 習字	「ごったく」を考える 料理 生け花(麻畑)	部落の歴史を調べる 料理 体育教室	手芸(下条) 料理(下条) 書き付け(下条) 家庭教育講座(東下組)	婦人の健康を考える講座
文集活動			「わらぼし」 「若芽」(家庭教育学級) 「またたび」(枯木又) 「山の灯」(枯木又) 出稼ぎ先へ送付する飛渡通信 「ふるさと」(東部分館)	「らくがき帳」	「信江」 「らくがき」(鮎、名ヶ山)	「東下組のわたし」	

動が立ち上がっていった。以下では、特に厳しい自然・経済・社会的条件のもとで地域課題に取り組もうとした2地区の事例についてみていく。

3-1 下条地区

(1) 出稼ぎ文集の試み

下条地区は、出稼ぎによる家族の問題が深刻化していた地区である。例えば、夫が出稼ぎ先で浮気をして蒸発してしまったり、稼いだお金を家族に送金せず使い切ってしまうことが問題化していた。そこで、小学校の冬季分校では、家族のきずなを絶やさぬよう出稼ぎ者の心を家族に向けさせるひとつの方法として、出稼ぎ先に小学生の作文と妻たちの生活記録を送るようになる。その代表的な取り組みが東下組小学校の二子冬季分校（「二子の母ちゃん」1～5号）と慶地冬季分校（「けいじのかあちゃん」1～2号）によるものであり、1966年から文集発送が行われた。号を重ねるにつれ出稼ぎ者からも返信があったり、老人クラブの会員も投稿を寄せたり地域文集になりつつあった文集活動であった。女性たちへの動機づけや編集を担った冬季分校の教員によると、1号は思い出について書く人が多く、2,3号は出稼ぎ、デバタ、豪雪など生活の中の困難が増え、4号になるとコメ作り、農業政策のこと、離村など現実的なことに踏み込んだ内容が増えて、物事を捉える視点の広がりを感じられたという²⁶。しかし、どちらも数年で取り組みは休止してしまう。その理由として、冬季分校の教員は、書かれた文集を活かした学習活動ができなかったこと、文集づくりが公民館活動の中に位置づかず、公民館主事など専門の社会教育職員の指導を持てなかったことから、書く必要が認識されていなかったと指摘している²⁷。その後、地区公民館主導で当集落を含む小学校区の婦人文集「東下組のわたし」（第一号、1974年）を発行する運びとなり、婦人学級で文集を用いた学習を展開しようとした。しかし、上述の出稼ぎ問題が深刻な慶地集落では人口流出とデバタ労働による多忙化で1969年に地域婦人会を脱退しており、その後婦人学級に参加する契機を失うこととなった。また、地区公民館が企画した婦人学級の学習活動も、「地域問題」を主題に企画したものの、各回の内容はそれぞれテーマが異なり、映画鑑賞や講師の講話などが主で基本的に受動的な学習方法が中心だった²⁸。その後文集は投稿者数が減少していき、途中から小学生の作文なども掲載した「地域文集」となるものの20号（1993年）をもって休刊となる。

3-2 飛渡地区

(1) 通信婦人学級の試み

飛渡地区も、急激な社会変化の中で婦人学級の学習活動を行うのが困難になっていった。飛渡地区で深刻な問題となっていたのは、女性たちのデバタ労働が長時間化したことによる健康上の弊害であった。そこで公民館職員は地元の病院や保健師と共同で実態調査を行い、その報告書をもとに学習会を開いたり、体操を地元の体育教師やデバタ従事者たちと考案したりするなど、住民の困難

に寄り添った地域密着の活動を地道に続けていった²⁹。

デバタや家事などの仕事に長時間追われている女性たちのために、学ぶ機会の提供と、住民同士のつながりづくりとして、地区館では通信婦人学級「わらぼし通信」という紙面を月2回発行しはじめる。記事の内容は健康、食生活、家庭、生活習慣などがテーマであり、紙面では時折地域の女性たちの日常や考えを綴った文章も掲載されていることから、通信を通して新たな知識や他者の意見を学ぶという、まさに「通信」型の婦人学級であった。多くの住民が、「わらぼし通信」が届くのを心待ちにして、時折「わらぼし通信」を材料に単発の学習会も行われた。また、年に一度のスクーリング「わらぼし通信のつどい」を開催し、話し合い学習を行うこともあった³⁰。しかし、地域ぐるみで行ってきた婦人学級の活動自体は参加者・回数ともに少なくなり、婦人学級の唯一の恒例行事が文集だけとなってしまった集落も出てくる。しかし、地域の女性たちのつながりが途切れつつある状況だからこそ、文集が「心の交流」の場となるようにと、公民館職員の支えのもと粘り強く刊行が行われていった³¹。

(2) 地域史学習から地域づくり実践へ

1970年代に入ると、急激な人口流出は落ち着いたものの離村者が途切れない状況は変わらず、地域に残された人びとの不安な思いは文集でもたびたび寄せられる中心テーマであった³²。地区公民館ではそのような現状をふまえ、かれきまた 枯木又という飛渡地区で最も山側に位置する集落の婦人学級に「枯木又の将来を考えてみよう」という動機づけを行い、婦人学級の中で話し合いを行うこととなった。その結果、過去のことを知らずに将来は考えられないのではないかと、ということになり、「枯木又を知ろう」という目的で地域史学習（1975～1978年）が行われることとなった。身近なことから調べることになり、年中行事や食生活、むらの伝説、子供の遊び、女の一生などのテーマが設定された。活動内容は、地域のおとしよりや家族から聞いたことを月に一回のペースで発表しあってまとめ、年度末には学習記録を冊子にするというものであった。そこで行われた地域の年表づくり、昔話の聞き取りなどの活動は、学級生からも「自分達も参加して学習するという一歩進んだこのやり方は、確かに意欲的に取り組めるし学習に活気がある」という声があがり、自分達で力を合わせてやることに楽しみややりがいを見出しながら取り組まれていった。また、思いがけない事実の発見に、ますます調べてみようという意気込みが高まって何度も遅くまで集まりを重ねたほどであった。この地域史学習は3年にわたって続き、婦人学級ではこの学習の成果に基づいて、伝えていきたい地域の昔話の影絵、版画絵本づくりが行われ、社会教育研究大会など様々な場での発表も行われた³³。

また、地域史学習が行われたことで、地元に伝えられているおどりや唄を次代に伝えていこうと、地元の伝承者を講師に郷土民よう講座も開講されることになり、仲間の輪を広げ保存会を作ろうという動きも出てきた。同様に、飛渡地区で古くから行われてきた文化活動である俳句を再び盛り上

げようと「かあちゃん俳句の会」も結成されて、「過疎化が進む中で、俳句を通して生きがいを、そして村に明るい灯を」と願いをこめた句集「山の灯」も発刊されるようになった³⁴。

このように飛渡地区の枯木又集落では、地域の歴史から何を学び、何を残していくかといった取り組みが地域史学習を通じて展開し、学習の成果やその過程で感じたことが文集等の冊子や様々な集まりでの報告を通じて発表されていった。

さらに、婦人学級の学習活動の影響をうけて、1978年には枯木又の青年たちも「むらの若い衆の歴史」研究に取り組んでいった³⁵。地域史学習の一連の過程で行われた地域資源の見直しの成果は青年たちのグループに引き継がれ、のちにエコミュージアムの会（1995年設立）として立ち上がる際の基礎資料にも用いられていくこととなる³⁶。また、このような学習活動の高まりを受けて、地区公民館の支援のもと飛渡地区全体の青壮年の組織化も進み、1985年「地域おこし青年会議」と「飛渡を考える会」が結成されて、彼らの視点から地域資源の活用を模索する活動が進められていった³⁷。このように、1980年代は女性たち、青年層、壮年層ごとのグループが各自の視点や力を活かした取り組みを活発に生み出し、成果が地域で共有されていった。

1990年代になると、人口の減少が進む中で既存の地域組織に基づいた活動のあり方にしぼられない、柔軟な組織づくりが進んだ。例えば、飛渡地区としての地域づくりグループ「濃実会^{のうみかい}」や枯木又エコミュージアムの会が結成されるが、両者ともに男性も女性もメンバーになることができる組織となり、地域の中では若手のメンバーで構成された。それぞれ活動内容は異なり、「濃実会」は小学校の「ふるさと環境学習」を地域全体でサポートすることを主たる目的³⁸としており、枯木又エコミュージアムの会は都市農村交流を通じた地域の活性化や地域文化の創造を目指している³⁹が、子どもたちとの交流や、都市住民との交流をとおした地域のとらえ返しという学びの機会を得ることで、住民による地域資源の対象化が行われており、地域の開放性も高まったものと思われる。

のちに、2004年の中越地震のボランティアをきっかけに集落にやってきた若者の受け入れや、「大地の芸術祭」越後妻有アートトリエンナーレ（1999年～）における作品受け入れを飛渡地区では積極的に行うこととなるが、以上のような諸実践の蓄積が、中山間地域という厳しい生活条件にも関わらず、地域社会の衰退に対抗し新たな生活を創造しようとする集落的主体の形成に寄与しているのではないかと推察される。

以上、高度成長期の下での婦人学級の停滞以降も、地域社会の抱える問題に迫ろうと試みた二地区の事例をみてきた。ここで、各地区の学習活動の特徴を確認しておく。下条地区の事例では、生活記録実践は他の学習活動との関連を有機的なものとするができなかった。また、出稼ぎ問題を抱えていた集落は地域婦人会を脱退したことにより公民館とのつながりも絶たれてしまい、文集発行を重ねた中で地域課題は浮き彫りになりつつも課題解決に迫る機運につながらなかった。

一方、飛渡地区の事例では公民館職員が地域住民のニーズを文集や生活の中から見出していき、その都度地域課題に対応した学習活動を組織していった。また、地域づくり実践につながる契機と

なったのは、婦人学級において地域史学習が行われたことである。女性たちが様々な地域住民から聞き書きを行う中で、地域の資源やアイデンティティ、うけつがれてきた暮らしの知恵に触れることとなり、人口流出が進み不安感が募る中、地域を捉え返す局面となって多くの住民を励ましたと思われる。その影響が波及して作られていった地域づくりグループも、既存の地域組織にとらわれない柔軟な組織化を進めたことと、「外部」との出会いが組み込まれた活動によって、地域的なしがらみを乗り越えて創造的なアクションに取り組むことができたと思われる。

おわりに

以上、十日町市の婦人学級が「停滞」に至るまでの展開と、高度成長期の地域社会変動に対峙して地域課題を突破しようとした二地区の事例をみてきた。初期の婦人学級は先進事例をなぞりながらどの地区もコース別学習と全体学習の方式にたどり着くが、その後の展開を分けることとなった、「停滞」を乗り越えた婦人学級の学習活動の条件について、仮説的に述べてまとめにかえる。

第一に、高度成長期の下での学習活動の組織方法や活動形態、活動内容の見直しのあり方である。社会変動の中で固定的な学習活動が続けられたり、学習の内容決定への参画ルートがない婦人学級では、地域集団としての学習活動が立ち消えていた。関連して、第二に、公民館職員による継続的かつ多面的な支援のもとで、「生活記録」によって明らかとなった地域課題とそれに取り組む「活動」が関連付けて展開されることで、生活記録実践は有意義なものとして位置づくということである。生活のありのままを書くことを推奨されながらも文集製作のみに活動がとどまっている場合、自分が置かれた状況を変革する実践とはいえない。もちろん、「書く」営みの意味はそれ自体が目的になりうる活動であるが、一方で本事例のように「なぜ書くか」を位置づけないと生活記録実践の意味が学習者にとって無くなっていき、むしろ無力感を高めかねないものと思われる。

第三に、婦人学級の「停滞」を経て地域づくり活動へとつながる契機として、地域史学習の役割が重要なものであったことは注目される。そこから様々な地域文化の創造にかかわる活動が生み出されており、地域資源の再発見が多様なアクターによって行われるようになった。このように地域文化の創造を軸とした地域づくり実践は、課題解決型の地域づくりとは異なる意味や役割をもっているように思われる。また、地域史学習において地域のことを聞き書きするということの持つ意味は、生活記録とはどのような共通点と差異があるのか、という点も深めていくべき課題である。

本稿は婦人学級とその後の展開をたどることにとどまったため、引き続きそれぞれの実践の内実について掘り下げて、詳細な検討を行う予定である。今後の作業を通して、生活に根ざした表現・文化活動の持つ意味を地域づくりとの関連で解明したい。

- 1 例えば、横山宏編『成人の学習としての自分史』国土社、1987年。辻智子「農村で女が「生活を書く」ということ—1945-1960年代の生活記録運動から—」『国立婦人教育会館研究紀要』1998年。
- 2 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動—東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年、p.228。高木重治「下伊那における婦人文庫・生活記録文集活動」『学術研究』第61号、早稲田大学教育・総合科学学術院、2013年2月。
- 3 横山宏「学習方法としての生活記録」『月刊社会教育』国土社、1977年4月号。
- 4 例えば、地域おこし実行委員会というNPOは、中越地震の際ボランティアとしてやってきたIターンの若者たちが集落の存続を目指して地域住民とともに立ち上げたグループである。(http://www.iketani.org/。閲覧日2015年4月15日。)また、アーティスト・地元住民・ボランティアの協働としてはアート・トリエンナーレ大地の芸術祭の取り組みが1999年以降継続して行われており、今や世界的にみても最大規模の芸術祭となっている。(http://www.echigo-tsumari.jp/。閲覧日2015年4月15日。)
- 5 「1955年度十日町市教育行政指導方針」、「公民館設置40周年記念シンポジウム」1987年、十日町市教育委員会。「十日町の社会教育実践レポート集No.7」1987年、「〃 No.8」1988年。
- 6 『十日町市史 通史編5 近現代二』1997年
- 7 新しい婦人のあり方や子どもの教育についての講演会、衛生講習会、新年会、旅行、敬老会、子供まつりなどが行われていた(上村政基「十日町市中条婦人学級のあゆみ」『月刊社会教育』1961年1月号、国土社)
- 8 上村政基「十日町市中条婦人学級のあゆみ」『月刊社会教育』1961年1月号、国土社
- 9 中条地区(同上、1961年)の事例同様、当時の婦人文集の多くが、発行元に「～婦人会」という名称を付けている。例えば、飛渡地区東部婦人会、吉田地区名ケ山婦人会など。
- 10 『豪雪と過疎と』、未来社、1976年。
- 11 『豪雪と過疎と』同上。
- 12 当時の六箇地区公民館職員へのインタビューより(2012年8月11日実施)
- 13 田村達夫「妻有のかあちゃんの生活と文集」『月刊社会教育』1965年11月号、国土社
- 14 同インタビューより
- 15 文集のはじめやおわりには、必ず主事からのメッセージが寄せられ、婦人たちが学ぶことや変わろうとすることへのはげましがなされた。そのために、学級生や婦人会の雰囲気に対して切り込んでいくメッセージも強く書かれた。例えば、「今の婦人会のあり方にあいそをつかしている人がいると思います。もっと民主的でもっと学習できるものでありたいと賢い人は思っているに違いないはず。けれども彼女等の前に大きな壁があるのは、みなさんの方がよくご存じでしょう。率直に言わせてもらいますが、あなた方の中にある権力争いです。…だがこんな小さな考えがあるうちは、やれ話し合いだやれ勉強だ、とさわいだところでクソの役にも立たないでしょう。」(「ざっそう」下条地区公民館、1960年)
- 16 同上インタビューより。
- 17 「心の垣根を取り払って話し、語っていた母ちゃんたちはやがてエンピツを握り、そのつぶやきや語り、話したことを書き記すという方向」『豪雪と過疎と』、同上。
- 18 『豪雪と過疎と』、同上。
- 19 研究会では、全41冊から「生活をありのままに見つめて書いてあるもの」「自分の考えや、感じたことを実感こめて書いてあるもの」という角度から作品を選んで編集した。(「妻有のかあちゃん」第一集、1962年)
- 20 60年代には、研究会に東京からのメンバー(横山宏氏など)が加わった。彼らは文集活動に強い関心を持ち、この活動を広げるべく尽力したという。「妻有のかあちゃん」の編集では、横山氏が中心的な役割を担っていた。(同上インタビューより)
- 21 田村達夫、1965年、同上。
- 22 「二、三年前の集会よりとても話し合いの機会が多くなりどの方も皆よく話し合いができるようになりました。」(「ざっそう 創刊号」下条婦人学級、1962年)
- 23 講師は、地元の学校教員を中心に依頼がなされた。
- 24 デバタ従事婦人の生活実態の調査と研究』新潟県教育委員会、新潟大学社会教育研究会、十日町市教育委員会、1965年2月。『出稼ぎ農民とその家族の生活—へき地山村の社会調査』十日町市教育委員会、新潟大学

-
- 社会教育研究室、1966年2月。
- 25 飛渡婦人会「とびたり」1966年など、当時の多くの文集でそのような記載が読み取れる。
- 26 中町保夫「生活記録文集「二子のかあちゃん」の発行を手つだって」『月刊社会教育』1969年8月号、国土社。中町保夫「雪、出かせぎ、出ばたと、生活記録」『月刊社会教育』1972年11月号、国土社。
- 27 文集制作後に一度反省会が行われる程度だった。(中町保夫、1969年、同上より)また、当時この地区の婦人学級の内容は、「料理」と単発の講演会やレクリエーションの実施のみであり、文集に出た意見を活かした試みにはつながることはなかった。(昭和41年度十日町市社会教育事業計画書)
- 28 『十日町市の社会教育 4』1975年、3月。
- 29 田村達夫「“デバタ体操”をつくる―出機従事婦人の健康問題と取り組む―」『社会教育』1976年10月号。
- 30 十日町市教育委員会事務局社会教育課・飛渡地区公民館「わらばし通信」1967年1月～1968年8月。十日町市公民館「公民館情報 No.11」1980年6月。
- 31 飛渡婦人会「文集 とびたり」1969年。
- 32 枯木又婦人学級「またたび」1971年。
- 33 十日町市公民館設置60周年記念事業実行委員会「十日町市公民館60周年記念誌」2009年。田村達夫「豪雪と過疎と」その後『社会教育』1977年11月号。
- 34 「市報とおかまち」1979年、6月号。
- 35 田村達夫「豪雪と過疎と」その後『社会教育』1977年11月号。
- 36 兼松芽永「循環する場所」としての枯木又「エコミュージアムと／から大地の芸術祭へ」平成24年国立民族学博物館若手セミナー報告レジュメ。
- 37 十日町市教育委員会『十日町の社会教育 No.8』1988年。
- 38 「飛渡濃実会の歩み」飛渡公民館作成資料。
- 39 枯木又エコミュージアムホームページ (<http://www.h4.dion.ne.jp/~k-wakaba/index.html>)。閲覧日 2015年4月20日。)